

文化財だより

【穂別博物館所蔵品民具資料のご紹介】

屯田兵官給品の鉄瓶



鉄瓶の底



鉄瓶の蓋

【写真】 穂別博物館所蔵の鉄瓶（登録番号 HMG-1631）

穂別博物館所蔵の鉄瓶についてご紹介します。【写真】は、屯田兵村で使われた官給品の鉄瓶とほぼ同形の鉄瓶です。大きさは、高さ約 17cm、幅約 25cm あります。瓶の形は、肩の張る茶釜様で、角張った胴体に、太く短い注ぎ口がつき、全体にざらざらした鑄型の跡がはっきりと残ります。丸みをおびた瓶の底には、3本の小さな脚があり、床に直置きするときは、脚で鉄瓶を支える仕組みになっています。無骨な擬宝珠様の摘まみのついた蓋も特徴的です。屯田兵官給品の鉄瓶と伝わるものは、上記したような特徴のほか、長い弦のついたものも有名です。

開拓時代の穂別は、屯田兵村そのものではありませんでしたが、明治四十四年の『室蘭支庁管内誌』に、明治二十九年頃から下穂別にある輪西屯田兵村部落財産地百七十万坪の一部を借り受け、明治三十六年までに約四十町歩を開墾したが、この年に屯田兵制度が終了したため土地を返還した、という主旨の記録が残されています。屯田兵の鉄瓶は、屯田兵移住給与規則第六条の八に定められた官給品であり、個人的な持ち出しなど大変難しかったという当時の

事情があります。このため、写真の鉄瓶は、兵村制度終了後に、ゆかりのある人物が穂別に持ち運んだのかもしれない。

鉄瓶は、炉鉤にぶら下げておき、特に冬場は一日中お湯を沸かし続けることもありました。このため、古い鉄瓶の口や内側には、白い炭酸カルシウムがべったりと付着しています。穂別博物館では、写真の鉄瓶のほかにも、民具資料として龍文堂や黄文堂など、かつて鉄瓶の老舗であったメーカーが製造した複数の鉄瓶を収蔵しております。鉄瓶からは、北海道の厳しい自然をたくましく生き抜いた先人の心が感じられます。

○資料 『穂別町史』昭和四十三年

『室蘭支庁管内誌』明治四十四年

【連絡先】むかわ町教育委員会生涯学習課社会教育G 電話【42】2487